

性感染症を正しく予防しましょう！

～梅毒・AIDS・クラミジア感染症について～

佐賀大学医学部国際医療学講座・臨床感染症学分野 教授 青木 洋介 先生

性行為によって移る感染症を性感染症（STI：sexually transmitted infection）と呼びます。

梅毒、淋菌感染症、クラミジア、ヘルペス、HIV感染症などがSTIの代表的疾患です。最近新しく感染したB型肝炎もSTIとして考えます。これらの感染症の原因となる微生物は、いずれも血液や粘液（広く体液と呼びます）あるいは粘膜を介して感染し、日常生活の中では、性交が感染リスクの最も高い行為となります。

梅毒、淋菌感染症、クラミジア、ヘルペスは、生殖器表面の潰瘍や排尿時の痛みあるいは排膿など、性器に関連する症状が出やすいのですが、HIV感染症やB型肝炎は発熱や咽の痛み、関節痛など、インフルエンザのような症状が出るので、「性感染症ではないか」ということを自分でも疑いにくいのです。いずれのSTIも性器の感染症として留まるのではなく、動脈瘤、脳炎、女性不妊症、AIDSなど、生涯にわたる健康被害をもたらします。今回は「梅毒」および「HIV感染症（AIDS）」についてご紹介いたします。

図1 梅毒：人口10万人当たり報告数の推移

報告数/人口100,000



国立感染症研究所 砂川、有馬ら

【梅毒について】

コンドームを着けない性器性交、口性交、肛門性交のいずれでも感染します。リスク行為から3週間程度を経過して性器表面に小さなしこり、あるいは痛みのない潰瘍が出現します。放置しておいても改善しますが、「治った」のではありません。この間にトシポネーマと呼ばれる梅毒の原因菌が血液を介して全身に回り、掌や足底、体幹に薄い褐色調の湿疹ができたり、唇、舌表面、咽頭や外性器表面に再度潰瘍を形成したりします。また、疲れやすさ、熱感、関節の痛み、リンパ節の腫れや、肝臓や腎臓の炎症、虹彩炎と呼ばれる目の炎症、脳や脊髄の外側を包む髄膜という膜に炎症を起こしたりします。治療はペニシリンという抗生物質を用いれば良いのですが、進行期の梅毒は全身に多様な症状が出るので、診断がなかなか難しいということが特徴です。

梅毒は2011年以降、男性、女性ともに感染者が増加しています(図1)。男性から女性へ、そして女性からまた別の男性へ、という感染様式が拡大していることが考えられます。幸いなことに、早期の症状で診断される例が殆どですが、S-T-1は一種類のみにかかるとは限りません。梅毒に感染した場合、HIVにも感染するリスクが高まることを知っておかなければなりません。



【HIV感染症およびAIDSについて】

HIV(ヒト免疫不全ウイルス)の感染によるS-T-1です。以前は、不幸にもヒトの血液成分を用いた治療で感染した患者さんがいらつしゃいました。現在は、この薬害によるHIV感染症の新たな発生はありません。

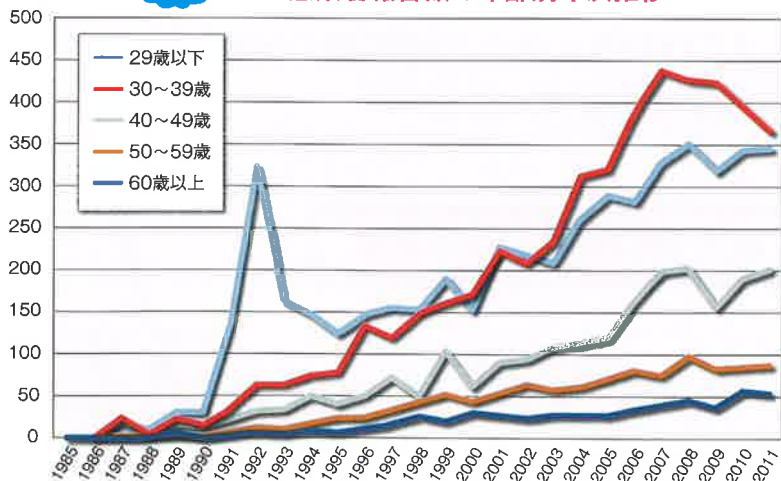
現在のHIV感染症のほぼ全てがS-T-1です。なかでも我が国では、男性同性愛者間でのS-T-1が最多であり、約70%を占めています。しかし、異性間性交による感染も無視できません。母子感染さえ起こり得ます。年齢別には20~40歳代の患者が多く、増加傾向にあります。2010年頃より増加傾向が頭打ちになっている感もありません(図2)。

HIV感染症は、感染後2~3週間後に、発熱、咽の痛み、皮疹、下痢、関節痛など、インフルエンザなどの一般のウイルス感染症と似た症状を呈します。風疹と間違われることも稀ではありません。これらの症状も3週間程度で完全に消失しますが、その後ウイルスは血液の中のCD4というリンパ球を破壊し続け、数年経過すると免疫力が低下し、様々な感染

症に罹患し易い状態になります。この状態をAIDS(後天性免疫不全症候群)と呼びます。HIV感染症には治療効果が期待できる薬剤が沢山ありますが、非常に高価であり、かつこれらの薬剤費の多くは国の医療財源から支払われています。



図2 HIV感染者報告数の年齢別年次推移



AIDS/STI-related database Japanより引用
http://www.aidssti.com/m_007_002.html

【STIに感染しないために】

STIの予防は“危険な性行為をしないこと”です。つまり、コンドームを装着せずに性行為を行うことはSTIに罹患するリスクを非常に高めます。コンドームは避妊具としてではなく、STI予防具として認識しておくべきであり、このことを性感染症予防の啓発の中で周知していく必要があります。

「クラミジア感染症について」

佐賀県医師会性教育対策委員会 委員 大隈 良成 先生

皆さんクラミジアってご存知でしょうか？クラミジアとは、クラミジア・トラコマチスという細菌が原因で引き起こる感染症です。クラミジアには様々な感染経路があります。眼にうつれば結膜炎（年配の方はトラコーマという病名を覚えてらっしゃるのではないのでしょうか）、肺に感染すれば肺炎等々、ところが最近問題になっているのは性感染症（性病）としての性器クラミジアです。

1990年代後半（約20年前）より、若者の性行動（初交）が早くなる中で、主に若年者を中心にクラミジアが急増してきました。今では、我が国の性感染症の中で最も数が多いと言われています。その原因として、感染しても症状が出にくいということがあります。ある報告によると、症状が出るのは男性では50%、女性にいたってはわずか20%くらいだと言われています。つまりクラミジアになっても症状がないので気づかない、気づかないから自分がまた別の人うつしてしまうという悪循環が繰り返されて、感染が蔓延していきます。

当院では、2002年から妊婦さん全員のクラミジアを調べていますが、当時は初産婦さん（初めて赤ちゃんを産む方）の10%がクラミジア陽性という状況でした。このことは一般女性の10人に1人がクラミジアに感染していることを推測させました。その後、クラミジアについての広報、検査、治療が進み徐々に陽性率は下がってはきていますが、2014年に日本産婦人科医会が全国的に行った大規模調査では、初産婦の2.4%がクラミジア陽性（10代では15.9%）という現状です。

クラミジアを放置しますと、男性では尿道炎、前立腺炎、副睾丸炎になることがあり、女性では子宮頸管炎、子宮内膜炎、卵管炎になり、不妊症や子宮外妊娠の原因となったり、妊婦の場合は流産、早産の原因になることもあります。また昨今、オーラルセックスが一般的になったため、咽頭を介した感染も増えてきています。クラミジア陽性の状態が続くと、HIVに感染する率も上がると言われています。

では、どうしたらいいかと言いますと、常にコンドームを正しく使用すること、一度でも性行為をした方は症状がなくても検査を受けることにつきますと思います。

